

随 想

チベット紀行

佐々木 教祐

2007年の正月にテレビを見ていたらNHKで「青海チベット鉄道 ～世界の屋根 2000 キロをゆく～」という番組をやっていた。2006年7月に中国青海省西寧からチベット自治区のラサに通ずる鉄道が開通し、それに乗ってラサまで行った旅行記録が美しい映像で紹介されていた。その鉄道は永久凍土地帯を走るのでトンネルを掘る時も凍土が溶けないように冷やして掘り、レールを凍土の上に敷いているので夏に凍土が溶けないようにアンモニアを中に入れた杭を打ち込むなど大変な工事だったと紹介していた。ヒマラヤ、崑崙といった峰々に抱かれた平均高度4000メートルの秘境チベットに5000メートルを超える山々を越えて走るこの列車に乗って行ってみたいと思い、旅行社のツアーに早速申し込んだ。

3月末に中部国際空港を発って西安を経て蘭州まで飛行機で飛んだ。日本に来る黄砂はこの辺から来るらしく、ここ蘭州の飛行場は到着時に強い風が吹いていたが、強い砂あらしで飛行機の発着ができないこともしばしば起こるとガイドさんの説明だった。砂漠の中の飛行場から蘭州の街までバスで1時間ほど走る間に道から見える赤茶けた山には小さな木が植林されていた。中国でも黄砂の被害が年々ひどくなり政府の掛け声のもと植林がされるようになったとのことである。黄河沿いの細長い街、蘭州で一泊し、次の日、高速道路で西寧に向かった。最近各都市を結ぶ高速道路が整備されバスで手軽に旅行できるようになった。

西寧では高度2000メートルを超える山道をバスで登り、ダライ・ラマ14世の生家を紅涯村に訪ねた。そこは遠くに雪をかぶった雄大な祁連山脈が望まれ、周りの山々にはまだ緑はないがもうすぐ来る春の裸麦の種まきに備えてヤクを使って山の斜面の段々畑を耕しているのが見られた。貧しい小寒村であるが雄大な景色の土地である。帰りにチベット仏教のゲルク派6大寺院の一つで明時代に創建されたタール寺を訪ねた。チベット仏教中興の祖であるツォンカパの修行した寺で、金の屋根瓦の大金瓦殿に収められている大銀塔にはツォンカパの遺物が収められている。また熱心な信者が五体投地をしながらお堂を回って

いた。多くのお堂にはバターの燈明がとまり、たくさんのお坊さんが修行をしていた。

世界で最も標高の高いタングラ峠 5072メートルを超えて走る青蔵鉄道には、西寧駅で夕方8時7分発のラサ行列車の軟臥車(一等寝台車)に乗り込む。国土の広い中国だが、遠く離れた北京時間が標準なのでまだかなり明るい。北京から来たという商社マンと同室になったが翌朝7時に着いたゴルムドで下りて行った。ゴルムドで高地用のジーゼル機関車に交換し、いよいよ永久凍土地帯に入っていく。遠くに雪をいただく雄大な山の景色を想像していたが、天気が良くなかったせいか凍った池が点々と続く風景の連続であった。午後2時ごろ世界一標高の高いタングラ駅(標高 5068m)を過ぎてチベット自治区に入り、少し進むと羊やヤクの放牧が見られるようになった。ラサに近づくにつれ、全面に氷の張った川は真ん中に細い水の流れが現れ、それがどんどん太くなり、水が流れる川に変わっていった。夜10時30分定刻通りラサ駅(標高 3650m)に到着した。バスでホテルに向かったが、町の中心にそびえるチベット仏教の聖地ポタラ宮が美しくライトアップされておりやっとチベットに辿り着いたとの感慨を胸にした。夜でも気温は19度と暖かいのは予想外であった。

ラサの気候の特徴として、①「非常に乾燥していること」、年間降水量は200～500mmで、ほとんどは6～9月の雨季に降る。また夕方から夜半にかけて降るので乾燥ははげしい。②「晴天が多く、日差しが強い」、ラサの年間日照時間は3000時間を超え、年間300日は太陽が照る計算になる。空気中のほこりが少ないことも相まって強烈である。アツという間に日焼けするので日焼け止めクリームとサングラスが欠かせない。チベットでは太陽光をパラボラアンテナのような反射鏡で反射させてその光でお湯を沸かす装置をいたるところで見られた。③「気温の差が激しい」、滞在している間、朝は5～8℃、昼になると22～24℃、日が暮れて19℃位であった。しかしバスの中は30℃を超え、冷房が必要になる始末である。現地ガイドの楊さんは半袖のシャツの上にコートを着て、昼間はコートの前を開いて着ていた。

ラサの歴史は、7世紀にチベット最初の統一王朝である吐蕃王朝のソンツェン・ガムポ王がネパールよりティツウン妃を、唐より文成公主を妻に迎えた。それぞれの妃がインド仏教と中国仏教をもたらし、トゥルナン寺、ラモチェ寺などが建てられ、都市としての基礎が築かれた。旧市街の中心にあるジョカン寺の本尊は文成公主が持参した黄金の釈迦牟尼像で、ティツウン妃がネパールより招来したと言われる弥勒像も安置されている。チベット仏教で最も聖なる寺院であるジョカン寺はソンツェン・ガムポ王の菩提寺として二人の妃が造っ

たものでと考えられており、今もチベット仏教の巡礼者が世界中からここジョカンに集まってくる。17世紀にダライ・ラマ5世がチベットを統一すると、ラサは再び首都になり、ポタラ宮、ガンデン寺、デプン寺、セラ寺などの寺院を拡張しチベット最大の都市になった。

ラサの空はどこまでも青く、強い日差しが照りつける。翌日10時にホテルを出てポタラ宮を見学する。ラサの象徴であるポタラ宮は、1959年にダライ・ラマ14世がインドに亡命するまで、観音菩薩の生まれ変わりとされるダライ・ラマの宮殿として使われ、宗教的なことを行う紅宮と政治的なことを行う白宮をはじめとする様々な建物から構成されており、高さ120m、東西360m、南北300m、総面積41平方キロメートル、1994年にユネスコの世界遺産に登録された。ジョカン寺も世界遺産に追加登録されている。

ここの標高は富士山より高いので高山病にならないように階段を登る時は20段ごとに休みながら進んだ。それでも階段を登るのがこんなに辛いことだと初めて知った。辛い思いをして階段を1時間ほどかけて登り紅宮に入ると、5トンの黄金を使用し瑪瑙やダイヤモンドなど1500もの宝石をちりばめたダライ・ラマ5世のミイラをおさめた霊塔を中心とする霊塔群、仏像群、曼荼羅、タンカ(仏画)などのほか、壁にはぎっしりとチベット密教の経典が積み上げられていた。

ガイドさんによると、「チベット人は仏教に篤く帰依し、カルマ(業)の教義を信じている。カルマの法則によるとこの世の幸も不幸もすべて前世の果とみなされる。ダライ・ラマは観音菩薩の生まれ変わりで、菩薩は悟りを得ながら自らの意志で地上に再臨し、仏の教えを衆生に取り次ぐ救世主として崇められてきた。新しいダライ・ラマの決定は、先代の死後、占いや瑞兆をもとに秘密裏に捜索され、一人の赤ん坊を先代の転生者として認定する。そのほか活仏と言われるこの世に生きる仏様も何人か居られる」と言う。

青蔵鉄道が開通し、大量のものがチベットに流れ込んでいる。しかし五体投地の礼拝を行いながら、ラサを進む若者の目は輝いていた。チベット仏教に生きている人々は、環境問題、民族問題、経済原理などの現代的な問題に直面しながら、今なお「秘境」として神話の中に息づいている。標高約4400mの高原にある「トルコ石の湖」と呼ばれる美しいヤムドク湖などを見て、ラサを後に空路上海を経て、中部国際空港に帰りついた。

(名古屋大学名誉教授)